

日本婦道記

風鈴

山本周五郎

青空文庫

妹たちが来たとき弥生やよいはちようど独りだった。良人おつとの三右衛門さんえもんはまだお城から下らないし、与一郎も稽古所から帰っていないかった。二人を自分の部屋へみちびいた弥生は縫いかけていた物を片つけ、縁側に面した障子をあげた。妹たちがきつと庭を見るだろうと思つたので、けれども妹たちはなにやら浮き浮きして、姉のころづかいなどまるで眼にいらぬようすだった。

「きようはお姉さまにご謀反をおすすめしにまいりました」

そう云いながら部屋へはいつて来た小松は、そのままつかつか

と西側の小窓のそばへゆき、明り障子をあけて、

「そらわたくしの勝ですよ」

とうしろから来る津留つるにふり返った、

「このとおり風鈴はちやんと此処ここにかかつてございます」

「まあほんとうね、呆あきれたこと」

津留は中の姉の背へかぶさるようにした、

「わたくしもうとうに無いものとはかり思っていました、それで

はなにもかも元の儘ままですのね」

「なにを感心しておいでなの」

弥生は二人の席を設けながら訊きいた、

「その風鈴がどうしたんですか」

「津留さんと賭けをしたんですの、風鈴がまだ此処に吊つてあるかどうかつて」

「おかげでわたくし青貝の櫛くしを一枚そんな致しました」

くやしいことと云いながら、津留はつと手を伸ばし、廂ひさしに吊つ

てある青銅の古雅な風鈴をはずして、そのまま窓まど 框がまちに腰をか

けた。小松は妹の手からすぐにその風鈴をとりあげ、なんの積り

もなく両手で弄もてあそびながら、ここへ来る途中からの続きらしい妹と

の会話をつづけた。

「……そうなのよ、なにかも昔どおりなの、このお部屋にある

箆たんす筒もお鏡台も、お机もお文ふ笥ばこもお火ひ桶おけも、昔のままの物が昔の

ままの場所にきちんと据えられて一寸も動かされない、そういう

感じなんです」

「いったいお姉さまはそういうご性分なのね、それとも一つその思うのだけれども、このお家には色彩というものが少ないのよ、武家だからという以上に、わたくしたちの髪かたちにしる衣装にしる、お部屋の調度にしるみんななじみなものくすんだ物ばかりで、娘らしい華やかさ、眼をたのしませるような色どりはまるで無かったのですもの」

「それはつまり若さが無かったことなのよ」

小松は風鈴をりりりりと鳴らしながらそう云った、

「わたくしがそう気づいたのは百樹ももきへとついで、あちらの義妹たちの日常を見てからだけれど、世間の娘たちがどういふ暮しぶり

をしているかということを知って、おどろくことが少なくありませんでしたよ」

「それは百樹さまとこの家ではお扶持ふちが違いますもの、ねえお姉さま」

「そうではないの」

小松はうち消すようにさえぎった、

「わたくし贅ぜいたく沢たくや華奢かしやを云うのではないのよ、一生のうちのむすめ時代というもの、そのとし頃だけに許される若さをいうんです、そしてこれはなかなか大切なことなんです、なぜかというとお百樹へ嫁してからの生活で、お部屋の飾り方とかお道具の調べようとか、また義妹たちの衣装や髪飾りのせわをするのに、ずいぶ

ん戸惑いをすることがありました、そしてこれはわたくしたちがむすめ時代の若さというものを味わずにしまったからだと思ひ当ることが多かつたのですから」

「ああそれであなたは今その若さをとり返していらつしやるのね」
津留はからかいぎみに笑いながら云つた。

「お暮しぶりがたいそうお派手だのご評判でございますわ」

「そんな、ひとのことを云つてよろしいの、秋沢さまのご家族こそ派手な評判ではひけをとらない筈なのに、わたくしみんな知つていてよ」

弥生は茶のしたくをしながら妹たちの 饒 じょうぜつ 舌 しつ を聞いていた。

はじめは微笑していたが、しだいにその微笑が硬ばり、唇の歪 ゆがん

でくるのが自分でもよくわかった。そしてそれ以上は黙って聞いているのに耐えられなくなり、二人の間へさりげなく言葉を挿しはさんだ、

「いったいご用というのはなに、二人とも肝心な話をさきに仰しやいな」

「ああそのことね」

小松は持っていた風鈴をそばにある用筆筒の上に載せ、姉のそばへ来て坐りながら云った、

「それはねえお姉さま、お城でもう五日すると重陽ちようようの御祝儀がございましょう、それが済んだらわたくしたち三人で、栃尾とちのおの湯泉いでゆへ保養にゆきたいと思ひますの、そのおさそいにあがった

のですけれど」

「栃尾へ保養に、わたくしが」

「これまでのご恩がえしに、小姉ちいねえさまとわたくしとでござ招待よ」

津留はずかずかと云った、

「なんにもご心配なさらないで、お姉さまはおからだだけいらしつて下さればいいの、ねえ、たまにはご謀反もあそばせよ」

「だめですよ、なにをのんきなことを仰しやるの、あなたたちは」
弥生はできるだけ調子をやわらげながら答えた、

「考えてごらんさいな、わたくしが家をあけてあとをどうするの、旦那だんなさまにお炊事をして頂けとでもいうんですか」

「それはわたくしの家から下婢をお貸ししますわ、気はしの利く

よく働く下婢がいますの、それを留守のあいだこちらへよこしますから、ねえお姉さまそれならよろしいでしょう」

津留はそう云つてあまえるようにすり寄つた。

二

弥生は妹たちに茶をすすめておいて、いちど片づけた縫物を膝ひざの上にとりあげた。そのようすでどうしてもだめだと察した津留は、すっかり落胆して「もう時刻だから」とそこそこに帰つていった。小松はもう少し邪魔をするといつて残つた、その口ぶりでまだなにか話そうとしているなど思い、弥生は押えられるように

心が重くなつた。小松は暫く姉の手もとを見まもつていたが、ふと詠嘆えいたんするような調子でこう云いだした。

「そうやってお姉さまがこれまで縫つていらしつた針の跡をつないでみたら、いったいどれほどの長さになることかしら、火桶に火も絶えて木こがらし枯の吹き荒れる夜半や、じつとしていても汗の滲にじむような夏の午ひるさがりにも、お姉さまはそうやってわたくしや津留さんの物を縫つて下すつたのね、そして今ではお義兄にいさまや与一郎さんの物をそうして縫つていらつしやる、そればかりではないわ、お洗濯やお炊事にどれだけの水をお遣いになつたでしょう、釜戸かまどや火桶で、どれだけの薪や炭をお焚たきになつたかしら、そしてこれからもどれほどの水を流し、どれほどの薪や炭をお焚たきに

なることでしょう、……そうしてお姉さまはやがて小さなおばあさまになつておしまいなさるのね」

小松はそう云いながら非難するようにかぶりを振つた。

「お姉さまこんなにして一生を終つていいのでしょうか、いつまでもはてしのない縫い張りやお炊事や、煩わしい家事に追われとおして、これで生き甲斐ががあるのでしょいか」

弥生は縫う手を休めてびつくりしたように妹の顔を見た。妹の頬には血がのぼつていた、三人のなかでいちばん縹きりよう緻よしといわれた少し険のある顔だが、感情の昂たかぶつているために美しく冴さえ、双の眼にはなにやら溢あふれるような光が湛えられていた、

「生活をお変えにならなければ」

小松は湿ったような声で続けた、

「下男や下婢にできることは、下男や下婢におさせなさるがよろしいわ、そしてお姉さまご自身もつと生き甲斐のある生活をなさらなくては、もつとよろこびのある充実した生きようをなさらなくてはね、そうお思いになりませんか」

「あなたはこの加内かだいの家で下男や下婢が使えらると思ひますか」

「それはお義兄さまのお考え一つですわ」

小松は遠慮をすてた口ぶりで云つた、

「まえから百樹がご推挙してゐる奉行役所へお替りになれば、そしてお義兄さまほどこご精勤なさるなら、家士の二人や三人お置きなさるくらいのご出頭はそうむづかしいことではないと思ひます、

百樹もそれはまちがいないと申ししておりますし、秋沢さまでもうしろだて楯たてになろうと仰しやっておいでですわ、お姉さま、途みちはすぐ前にひらけていますのよ、手を伸ばしておつか捉つかみになればいいのですわ」

「それはそうかもしれないけれど」

弥生はためらいぎみな、云いわけをするような調子でこう云った、

「加内はいまのお役しよが性しよに合あっているからとお断ことわり申したのでしよう、それにおんなの口からお役目のことなど云えはしませんからね」

「そういうお姉さまのお考えも、いまのお役しよが性しよに合あっていると

いうお義兄さまのお考えも、沈んだように動きのないこの家の生活からくるのではないでしょうか」

小松は片手で部屋の中をぐるつと撫なでるようなしぐさをした、

「こういうお暮しぶりからまずお変えになるのよ、お姉さま、時どきはお部屋のもようを変えてごらんなさいまし、お花を活けるとか、お道具の位置を移すとか、襖ふすまを張り替えるとか、お姉さまもたまにはお召物を違えたりお化粧をなすつたりしななければ、…そうすれば家のなかも活き活きとなるし、しぜん気持も動いてきますわ、お姉さまのお考えも、お義兄さまも、ええ、きつともう少しは出世のお欲ほすが出てくると思っています」

「こういう言葉を辱はかずしめでないと否定するためには、姉いもう

との近しきとか、親しいいたわりという感情につかまらなくてはならなかつた。……小松が帰つていつたあと、縫物を膝の上に置いたまま、弥生はやや久しいあいだ惘もうぜん然ときと刻をすごした。明けてある障子の向うに狭い庭がみえる、午後のもう傾きかけた日ざしのなかに、芒すすきの穂が銀色に浮きでている、萩はぎの撓たおやかな枝もさかりの花で、そのあたりいちめん雪を散らしたようだ。庭とは名ばかりの狭い、なんの結構もないものだが、芒が穂立ち萩の咲くこの季節だけは美しくなる。秋のふぜいがあふれるようで、いつまで眺めても飽きることがない、妹たちもこの家にいるじぶんは嵯峨さが野のうつしなどといって自慢の一つにしていた。さつき二人がはいつて来たとき障子をあげたのは、彼女たちがまえのようによるこ

びの声をあげて呉くれると思つたからだ、然し二人とも見向きもしなかつた、たとえ見たにしてもあの頃のようなよろこびは感じなかつたに違のどい、閑かな秋の日ざしのなかの、芒や萩の伏枝をみて侘わびしいおもいをたのしむような気持は、もう妹たちにはなくなつてゐるのだ。弥生はそう思いながらやるせないほど孤独な寂しきにおそわれるのだった。

「どうしたのだ」とつぜんうしろでそういうこえがした、「ぐあいでも悪いのか」ああと弥生は身ぶるいをしながらふり返つた、良人の三右衛門がそこに立っていた。

「お帰りあそばせ」

弥生はうろたえて赧あかくなつた、

「つい考えごとをしておりました」

しどろもどろに云いながら、居間のほうへゆく良人のあとを追った。

三

明くる日、部屋の掃除をしているとき、用筆筒の上に風鈴のあるのをみつけた。妹たちが廂からはずしてそこへ置き忘れたのである。弥生は手にとって暫く見ていたが、やがてそれを筆筒の小^{ひきだし}抽出の中へしまい、気ぬけのした人のようにそこへ坐つて、ひとりしんと考えこんでしまった。そのときから弥生はものおもう

日が多くなり。過ぎ去つた二十九年というとしつきを幾たびも思
いかえした。

父が世を去つたとき弥生は十五、小松は十一、津留は九歳だつ
た。それより数年まえに母も亡くなつていたので、なにもかもい
つぺんに弥生の肩へかかつてきた。家政のことや二人の妹のせわ
は云うまでもない、武家のならいで跡継ぎがなければ家名が絶え
るから、同じ家中で松田弥^や兵衛^{へえ}という者の二男を養子にきめた。
もちろん盃^{さかずき}だけで祝言をあげたのは三年ののちのことだったが、
こういう身の上の変化をうけとめるには、弥生の年はまだ余りに
若すぎた、母方の伯父がうしろみになつて呉れたけれど、弥生は
できる限りひとりだけでやつてゆく覚悟をし「自分は今からおとなに

なるのだ」そう自分に誓って、ともかく加内の家を背負って立つたのだった。生活は苦しかった……扶持は十石あまりだったが、まだ相続者が役に就いていないので、実際にさがるものは約その半分にすぎない、元もと切詰めた経済でようやく^{しの}凌いできた状態だったから、衣類や調度はむろん日用のものもすべて不足がちだった。一片の塩魚を買うにも、いや味噌や醤油を買うにさえ、^か銭ねぶくろ

囊の中をなんども数え直さなければならぬような生活、それを弥生は十五歳の知恵できりまわしていったのである。……良人を迎えてからも、暮しは依然として楽にならなかつた。三右衛門はあまり口をきかない温厚な人で、加内へ婿にはいる少しまえから勘定所へ勤めていた、それで扶持も十五石余りに加俸された

が、役目が上納係といって農民と直接に交渉をもつ部署であり、所管の郷村を視まわることが多いので、しぜん細こまごました出費が嵩かさむため家計はむしろ苦しくなつたくらいである。こうした日常のなかで、なにより心を痛めたのは妹たちのことだった。ふた親のない貧しい生活で卑屈になつたり陰気な性質になつたりしないように、できるだけ明るくのびのびと育てたい、世間へ出てわらわれないほどには読み書きや作法も身につけてやりたい、若い弥生にとつてはその一つ一つが困難な、どつちかというは無理なことであつた、然しそれを困難だとか無理だなどと考えることはゆるされなかつた、どんなに辛くともそれを克服してゆかなくてはならなかつたのである。

小松は十八歳のとき、望まれて百樹家へ嫁した、百樹は二百五十石の寄合組であるが、良人の^{ゆきえ}靱負はすでに用人格で、俊才という評判の高い人物だった。縹緞^{せんと}でのぞまれたのと、身分の違うのが不安だったけれども、頭の敏い小松はよく婚家の風に馴れ、案外なくらい良縁としておさまった。それから三年たつて津留も結婚した。これは百樹の媒酌で、相手は秋沢^{つぐのすけ}継之助といい、^{こしよ}扈従組の上席で三百石のいえがらだった。……こうして二人の妹を恵まれた結婚生活に送り出したとき、弥生は自分の努力のむだでなかったことを知り、それだけでも充分に酬われたように思った。無経験な若い自分の思案と、乏しい家計で、ともかくもここまでこぎつけることができた、亡き父や母もたぶん満足して下さ

るだろう、そして妹たちも、いつかは姉の苦勞がどのようなものだったかということを知つて、感謝して呉れるときがあるに違いない、そう信じてきたのであつた。

妹たちは少しずつ性質が變つていった。環境が違つたのだからふしぎはないのだろうが、加内の家へ来るたびに、この家の貧しさを厭いとうようすが強くなり、ときにはこのような貧しい実家を持つことを恥じるような口ぶりさえみせるようになった。弥生はそれを怒つてはならないと思つた、妹たちがそういう考え方をするのは現在の生活が豊かに恵まれている証拠である、この家の明け昏くれをなつかしがるようではそれこそ不仕合せなのだ、そう思つて穏やかに聞きながしていた。けれど妹たちにはそういう姉の態

度が却つてももの足りないようだった、義兄の三右衛門がいつまでも勘定所づとめなどをしていては、婚家との親類づきあいに肩身がせまい、もつと覇氣はきをだすようにすすめたらどうか、そんなことも云いだした。そしてついさきごろには、小松の良人の百樹鞆負から、奉行所へ推挙するから役替えをする気はないかという相談があつた。つづいて津留の婚家からおなじような話をもつて来たが、三右衛門は、

「現在のお役には馴れてもいるし自分の性にも合うから」といって両方とも断わってしまった。

これらのことを思いかえすたびに、弥生は自分のこしかたが徒労であり、これからさきも徒労であるような気がしはじめた。津

留といっしよに來た日、小松は「自分たちには娘時代というものがなかつた」という意味のことを口にした、弥生にとってこれほど痛いかなしい言葉はない、妹たちもいつかは自分の苦勞を知つて感謝して呉れるときがあるだろう、そう信じていたのに、まったく反対な非難をあげせられたに等しい、弥生は怒りを抑えるために身がふるえた。それでは自分のしてきたことは無意味だったのか、あれだけの努力は妹たちにとってなんの価値でもなかつたのか、

「そしてお姉さまは年をとつて、やがて小さなおばあさまになつてしまうのね」

小松はそう云つた。ああ、と弥生はいま呻くうめように溜息ためいきをつ

く、こうして苦しい日を送り、苦しい日を迎えて自分の一生が経つてしまう、ほんとうにこれでいいのだろうか、これで生き甲斐があるのだろうか、そう思つては暗い絶望的な気持ちにおそわれるのだった。

四

芒の穂はかなしくほおけ、萩の花は散りつくした。朝な夕なはひどく凍いてて、水仕事をしたあと、手指の赤く腫はれる季節となつた。弥生はその頃から家の中の道具をあれこれと少しずつつ動かしてみた、箆笥を脇のほうへ移したり、鏡台と机とを置き替えたり、

常には使わない対立屏風を出してみたり、ちよつと馳走のあるときは客膳きやくぜんを用いたりした、そうするとたしかに家の中があたりしくみえ気持も動くように思える、「まるでよその家へいったようですね」九歳になる与一郎はそんなことを云つて、珍らしそうに部屋の中を見てまわつたりした。それから弥生はしばしば着物や帯をとり替えて着た、ずいぶん思いきつて、ごく薄く化粧もしはじめた。そういうことに遠ざかつて久しかったから皮膚もなずまないし、なかなか手順がうまくいかなかつた、幾たびやりなおしても氣にいらす、しまいには拭き取つてしまうことも多かつたが、白粉おしろいや臙脂べにや香油などのおやかな香に包まれていると、なにやら若いだ浮き浮きするような気持になり、思わず

刻の経つのを忘れることもあった。

三右衛門はかくべつなにも云わなかった。弥生がきようは美しく化粧ができたと思つたとき、いちどだけ微笑しながらつくづくと見て呉れた、

「いいな、化粧というものは男が衣服袴はかまを正すのと同じで、気持ちをしゃんとさせるものだそうだ、これからもそのくらいの化粧はするほうがいいだろう」

そのとき弥生は恥ずかしいほど満たされた気持で、良人の前を立つて来ると暫く鏡を覗のぞいていた。……然しこれらのことはながくは続かなかつた、道具のありどころもたびたび変えるわけにはいかないし、変えてみてもいつもそう新らしい気持にはなれない。

つましい経済では白粉や臙脂はかなり贅沢につくし、時間の惜しいときのほうが多いのでしぜん手軽に済ませておくようになる。こうして箆筒も鏡台も机も、いつかしら元の場所におさめられるのを見て、三右衛門はなにやらほつとした口ぶりでこう云った、

「部屋のもよう替えも気分が變つていいが、やっぱり道具にはそれぞれ据えどころがあるものだな、私にはこのほうがおちついてよい、眼さきの変るのはその時だけのことだし、なんとなくざわざわしくていけない」

「少しは住みごこちもおよろしかろうと思つたものですから」

「家常茶飯は平凡なほどよいものだ、余りそんなことに頭を疲らせないがいい」

試みたことは詰まるところなにもも齎しては呉れなかつた。
冷える朝の厨くりやで水を使いながら、またひようひようと風の渡る夜
半、凍える指さきを暖め暖め縫い物をしながら、弥生は再び生き
甲斐ということを思いはじめた。——これが自分の生活なのだろ
うか、こうして自分の生涯は経っていつてしまうのだ、同じ着物
を縫ったり解いたりしながら、ものみ遊山もせず、美味に飽くこ
となく、ひたすら良人に仕え子を育て、その月その年の乏しい家
計をいかに繰りまわすかということむなで身も心も疲らせて、やがて
空しく老いしぼんでしまう、「これでいいのだろうか」弥生はぞ
つとするような気持でそうつぶや呟く、「こういうしはてのない困難の
克服になにか意味があるだろうか、もつとほんとうに生き甲斐の

ある生活がほかにあるのではないかしらん」そして惑わしのよう
に、いつか小松の云った言葉があたまにうかんでくるのだった。

——これまでに縫いつくろいをして来た針の跡をつないだらどれ
ほどの長さになるだろう、恐らくそれは想像を絶する長さに違い
ない。然もそこからはなにものも遺らなかつた。炊事や洗濯に使
い捨てた水、釜戸や火桶で焚いた薪や炭、それらの量もたぶん驚
くべき嵩かさに違いない。そしてこれまたそこからはなに一つとして
遺るものはないのだ。然もそういう苦労を凌いで育てた妹たちか
ら非難のこえを聞くとすれば、いったいなんのための苦労かと疑
いたくなるのは無理もあるまい。弥生は初めて、ほんとうにつき
つめて考えぬかなければならぬことにゆき当つたと思つた、あら

ゆる人間がその問題について考えるとき必ずそう思うように……。

「このごろなんだか沈んでいるようではないか」

良人が或る夜そう問いかけた、

「からだのぐあいでも悪いのではないか」

「はあ……」

さようなことはございませぬ、そう云おうとしたが、にわか
に感情が昂たかぶつて口がきけず、そのまま黙つて眼を伏せた、

「どこか具合が悪いのか」

三右衛門は訝いぶかしげにこちらを見た、

「もしそうなら無理をしてはいけない、医者にみせるとか薬をの
むとかしなければ」

「べつにからだが悪いわけではございませんけれど、なんですか気分が重うございまして……」

「わけもなしに気分の重いということもなからう、いちど医者にみて貰ったらどうだ」

「はい」

弥生はふと顔をあげた、いつそ良人にすべてをはなしてみようか、良人には良人の意見があるだろうし、それを聞けば或いはこの悩みも解けるかもしれない、はなすならこの機会だ、そう思つて口まで出かかったが、やっぱり言葉にはだせなかつた、良人は男である、こういう女の苦しみは、話してもわかつて呉れないであらう、かなしくそう諦め^{あきら}てさりげなく、その場をとりつくろつ

て済ませてしまった。

五

霜月にはいると北ぐにの野山はもう雪に蔽おおわれる、昼のうち日が照って、昨日の雪が消えたと思うと、明くる朝はまたちらちらと粉雪になり、昏くれがたには五寸も積もる、そういうことを繰返すうちに、やがて三四日も降り続いて寝雪となる日が来るのだ。……その年は珍らしく寝雪が遅く、月のなかばを過ぎてもまだ土の見えるところが多かった。まるで季節が返りでもしたような、或る晴れた暖かい日の午後、小松が下婢に包物を持たせて久方ぶ

りに訪ねて来た。

「あのときやめた栃尾へようやくいつてまいりました」

小松は健康に満ちあふれるような顔に、いたずらめいた笑いをみせながらそう云った、

「やっぱり津留さんと誘い合わせましてね、もう雪でしたけれど、却って客が少なくてようございしました、山鳥を飽きるほどたべましてね」

そしてのびのびと解放された四日間の楽しかったこと、美しい谷川に臨んだ宿の眺め、気ままに浸る温泉のこころよい余温に包まれる寝ごこちなど、絵に描いてみせるように巧みに話しつづけた。

「でも津留さんにはびつくりさせられました、夕餉ゆうげには四たびともお酒をあがるのですものね、いつも秋沢さまのお相手をするので癖になったのですって」

「あなたもあがったんですか」

「ほんのお相伴くらいでしたけれど」

小松はもういちどいたずらめいた笑い方をした、

「でもなんだかひめごとのようで楽しいものですのね、お姉さまもこのつきにはぜひいらっしやらなければ」

「わるい方たちね……」

そう云いながら、もし自分にもそんなことができたらどんなに楽しかろう、疲れた心やからだがどんなに休まるだろうと思い、

それが不可能だとわかりきっているだけに、弥生の気持は耐えられぬほどの寂しさにおちこむのだった。

「きようは時刻を限られていますから」

小松は間もなく坐り直し、下婢に持たせて来た包みをひき寄せた、

「やまどりを持ってまいりましたの、お小遣いが少のうございましてからほんのかたちだけのお土産よ」

そう云って包みを解きにかかった。

そのとき門ぐちに人のおとずれる声しようべえがした。出ていってみると、勘定奉行の岡田庄兵衛しようべえという老人だった。

「おいでか」

といつもの柔和の調子で訊いた。良人は非番で家にいる日だったが、昼食をするとすぐ川のほうを歩いて来ると云つて、与一郎をつれて出かけたあとだった。

「それでは間もなく帰るな」

老人はちよつと考えるようすだったが、

「やっぱり待たせて貰おうか」

そう云つて氣がるに奥へとおつた。……部屋へ戻ると小松は帰りじたくをしていた、

「お客さまはどなた」

「お役所の岡田さまよ」

そう答えながら弥生は茶の用意をした。小松は岡田と聞いてあ

あとという表情をした、

「やっぱり、いらしたわね」

「やっぱりって、あなたなにか知っておいでなの」

「あのはなしですわ、きつと」

小松はそつと声をひそめた、

「いつかのお役替えのこと、お義兄さまはお腰が重いから、せんじつ百樹がじかに岡田さまに会ってご相談したのですつて、きつとそれでいらしたに違いありませんわ、ねえお姉さまこんどこそお義兄さまにひとふんぱつして頂くのね、そして加内の運のひらけるようにしなければね……」

小松を送りだしたあと茶を運んでゆくと、岡田老人は火桶へ手

をかぎしながら一冊の写本をひらいて見ていた。その机の上から取ったのだろう「妙法寺記みょうほうじき」という題簽だいせんで、半年ほどまえに良人が御菩提寺ごぼだいじから借りて来て筆写しているものだった。良人の写した方の題簽には「鈔しょう」という字が付いている、たぶん原本からなにか鈔しょうろく録ろくしているのであろう、写し終えて綴じたものがもう六冊あまりもある筈だ。老人はなにか感に堪えぬようすで、しきりに頁を繰ってはぶつぶつ独り言を呟つぶやいていた。……ほどなく三右衛門が与一郎をつれて帰って来た。弥生が茶を淹いれかえにゆくと、二人はその写本のことを話していた。

「さようです」良人はそこへ筆写した書冊をとりだしながら説明した。「はじめ御書庫の中で分類本朝年代記というものを拝見し

まして、飢饉ききんの条のあまりに多いことから思いつき、それに類する書物をさがしまして、精くわしい年表を作ってみようと始めたものでございます、なにしろふと思いつきましたことで準備もなにもなし、また私ひとりのちからではそうてびろく参考書を集めることもできませんので、まず下調べ程度のもものが作れたらと考えております」

「然しそこもとの多忙なからだでどうしてこんなむつかしいことを始める気になったのだ」

「それはこの表に一例を書いてみました」

三右衛門はそう云つて別の書冊をひらいた、

「このように年次表に書きあげますと、飢饉の来る年におよそ週

期があるのです、この表はもちろん不完全きわまるものですが、凶作があつて一年めに飢饉の続くことがもつとも多く、つぎには五年ないし六年めにくる例がひじょうに多い、この年次表がもつと完成して週期の波がはつきりわかるとすれば、藩の農政のうえにかなり役だつだらうと思うのですが」

「たしかに」

岡田庄兵衛は大きくうなず頷いた、

「そうすれば、冷れい旱いかん風水による原因もわかつて耕作法のくふうもあろうし、また荒凶に対する予備もできるだらう、だがそれは独力では無理だ、ぜひ勘定役所の仕事にしなければ……」

それから老人は、役所の者がみなこういう点にまで注意するよ

うになつて欲しいこと、それが政治を執る者の良心であるということなどを熱心に述べるのだつた。

六

その話が済むと碁になつた、岡田老人と三右衛門はよい碁がたきで、しばしば招かれてゆくし老人のほうからも時どき打ちに来る。かくべつ珍らしいことではないのだが、その日は小松に囁かささやれたことがあるので、弥生はなんとなくおちつかず、ともすると二人の話しごえに耳を惹ひきつけられた。……碁は日昏れに及んだ、夕餉ゆうげには小松がみやげに持って来た山鳥を割いて出した。それか

らまた碁が始まり、与一郎を寝かせてから、寒さ凌ぎに葛湯くずゆを作つていつたときも、二人はさも楽しそうに石の音をさせていた。

——小松は思いすごしたのだ、お役替えというような話なら、こんなにながく碁など打つていらつしやる筈はない。そう思うと弥生はなにやら裏切られたような寂しい気持になり、行燈をひき寄せながらひっそりと縫い物をつづけた。

どのくらい経つてからであろう、石の音がやんでしずかな話しごえが続くのに気づき、ふとそちらへ注意すると「奉行所」という老人の言葉が聞えた。弥生は思わず針を措おき、少し膝をにじらせながら耳をすました。

「たとえ百樹どの秋沢どのがうしろ楯にならずとも、奉行所でそ

こもとほどの才腕を活かせば、少なくとも現在ののような恵まれな
いことはない」

老人は平らにくだけた調子でそう云った、

「自分の預かっている役所に就いてこんなことを申す法はないだ
ろうが、勘定所つとめではさきも知れているし、殊にそこもとの
仕事は気ぼねばかり折れて酬われることの少ないまったく縁の下
のちからもちだ、わしも役替えをするほうがよいと思うがな」

「それも考えてはみたのですが、やっぱり私には今の役目が身に
合っていると思いますので……」

「だがそれでほんとうに満足していられるかな、機会はまたとい
うわけにはゆかぬものだ、あとで悔やむようなことはないかな」

そこでぶつりと話しごえがとだえた。森閑と冴^さえた宵のしじまを縫って、廂を打つ雨の音がひっそりと聞える、ああ降りだした、弥生がそう思ったとき、三右衛門のしずかに口を切るのが聞えてきた。

「役所の事務というものは、どこに限らずたやすく練達できるものではございません、勘定所の、ことに御上納係は、その年どしの年貢割りをきめる重要な役目で、常づね農民と親しく接し、その郷、その村のじつさいの事情をよく知っていなければならぬ、これには年数と経験が絶対に必要です、単に豊凶をみわけられるだけでも私は八年かかりました、そして現在では、私を措いてほかにこの役目を任すことのできる者はおりません、……それとも誰か

私に代るべき人物がございましょうか」

「正直に申して代るべき者はない」

「……こんどの話がどうして始まったか、推挙して呉れる人の氣持がどこにあるか、私にはよくわかつています」

三右衛門はこう続けた、

「その人たちには私が榮えない役を勤め、いつまでも貧寒でいることが氣のどくにみえるのです、なるほど人間は豊かに住み、暖かく着、美味をたべて暮すほうがよい、たしかにそのほうが貧窮であるより望ましいことです、なぜ望ましいかというと、貧しい生活をしている者は、とかく富貴でさえあれば生きる甲斐があるように思ひやすい、……美味うまいものを食ひ、ものみ遊山をし、身

きれいなままに暮すことが、粗衣粗食で休むひまなく働くより意義があるように考えやすい、だから貧しいよりは富んだほうが望ましいことはたしかです、然しそれでは思うように出世をし、富貴と安穩が得られたら、それでなにか意義があり満足することができるでしょうか」

弥生は身ぶるいをした。こめかみのあたりが白くなり、緊張のあまり顔つきが硬ばった。廂を打つ雨の音はやみもせず高くもならなかったが、気温はぐんぐん冷えて、膝や手足の指は凍えるように思えた。

「……おそらくそれだけで意義や満足を感じることにはできないでしょう、人間の欲望には限度がありません、富貴と安穩が得られ

れば更に次のものが欲しくなるからです」

良人のこえは低いうちにも力がこもってきた、

「たいせつなのは身分の高下や貧富の差ではない、人間と生れてきて、生きたことが、自分にとってむだでなかった、世の中のためにも少しは役だち、意義があつた、そう自覚して死ぬことができるかどうかが問題だと思ひます、人間はいつかは必ず死にます、いかなる権勢も富も、人間を死から救うことはできません、私にしても明日にも死ぬかもしれないのです、そのとき奉行所へ替つたことに満足するでしょうか、百石、二百石に出世し、暖衣飽食したことに満足して死ねるでしょうか、否、私は勘定所に留まります、そして死ぬときには、少なくとも惜しまれる人間になるだ

けの仕事をしてゆきたいと思ひます」

膝を固くし頭を垂れていた弥生は、みえるほどからだが震えるのを抑えることができなかつた。感動というよりはざんき慚愧に似たするどい思考が胸につきあげ、それが彼女を二つにひき裂くかと思へた。——生き甲斐とはなんぞや、ながいこと頭を占めていたその悩みが、いま三右衛門の言葉に依つてひとすじの光を与えられた。それはまぎれもなく暗夜の光ともたとえたいものだった。——貧しい生活をしていると富貴でさえあれば生き甲斐があると思ひやすい、良人は今そう云つた。自分が思い惑つたのも、つきつめれば妹たちの暮しぶりをみ、その非難を聞いて、自分の生活よりは意義があり充実しているように考えたからだ。なんというあ

さはかな無反省なことだったろう、縫い張りや炊事や、良人に仕え子を育てる煩瑣はんさな家事をするかしないかが問題ではない、肝心なのはその事の一つ一つが役だつものであつたかどうかだ、女と生れ妻となるからは、その家にとり良人や子たちにとって、かけがえの無いほど大切な者、病気をしたり死ぬことを怖おそれられ、このうえもなく嘆かれ悲しまれる者、それ以上の生き甲斐はないであらう、然し。それでは自分はこの家にとつてはたしてかけがえのない者であるかどうか、どうしても無くてはならぬ者だろうか。……弥生には然りと思うだけの自信も勇氣もなかつた。

「そうだ」彼女はしずかに面をあげた、「少なくとも良人や子供にとつてかけがえのない者にならなくては」そう呟くと、なにか

しら身内にちからが湧いてくるようだった。弥生は立ちあがり箆筒の小抽出の中から青銅の風鈴をとりだした。秋のころ妹たちが外していったのを、どうしても吊りなおす気になれなかったものである、——あるときから気持がゆらぎだしたのだ。そしてこの数十日ずいぶん思い惑ったことはむだではなかった、こうして今こそ生きるみちをたしかめたのだから。……そう思いながら弥生は小窓をあけた、外はいつのまにか粉雪になっていた。「まあ、とうとう」燈火をうけて霏々と舞いくるう雪の美しさに、弥生は思わず声をあげながら、手を伸ばして風鈴を吊った。あるかなきかの風に、久しく聞かなかつた滴^{てい}丁^{ちん}東^{とん}の澄んだ音がひびきだすと、その音を縫って三右衛門のこう呼ぶこえが聞えた。

「弥生お帰りだぞ」

青空文庫情報

底本：「山本周五郎全集第二巻 日本婦道記・柳橋物語」新潮社

1981（昭和56）年9月15日発行

1981（昭和56）年10月25日刷

初出：「婦人倶楽部」大日本雄辯會講談社

1945（昭和20）年11月～12月

※初出時の表題は「生き甲斐」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井和郎

2020年1月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日本婦道記

風鈴

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 山本周五郎
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>